

南関東一都三県にまたがる東京は、世界に例をみない巨大連たん市街地である。いうまでもないが問題が多い。過大である、過密である、都市施設が貧弱である、災害に対して安全でない、排棄物処理、水・大気の汚染など問題のどれ一つをとってみても、解決のキザシはみえない。が、みえないからといって努力を怠っていたわけではない。問題を少し解決すると次の問題が待ち受けている。問題を追いかけ、追い抜かれながら、走ってきたことは確かである。都市問題がまったくなくなったとしたら、都市は死滅するのかも知れない。都市はこうした形で改造され、そこに見られ、感じられる街ができ上がってきたわけである。都市、あるいは街は、改造の結果を積み上げた蓄積そのものといってもよい。東京に対する改造は、しばしば大火に見舞われた江戸の街のそれにつながっている。大江戸も多くの問題をかかえていた。過密・過大に対する対策や改造は何も今日の問題ではなく、江戸時代から引き続き受け継がれてきた課題なのである。永遠の課題といえなくはない。

だからこそ、それぞれ当代一流の人士をして課題に排戦せしめたのである。江戸改造論は封建社会体制肯定の上とはいえ、過大都市分散論として展開されている。熊沢蕃山に始り徂徠によって体系化された過大人口の地方分散と江戸市中土地利用の再編成論は、武士階級の知行地への土着化を前提としたとはいえ、江戸の行政機能強化を図りつつ、江戸の縮少を提案

したものであった（西川幸治著「日本都市史研究」より、以下同じ）。また、室鳩巢の提案は、江戸の周辺 10～15 km にニュータウンを建設し、不要の人口を吸収し、スプロールを防ぐものであった。

元禄期から幕末に時代が下るに従って、江戸改造論は防災を軸に市街地改造、防火建築の提案、あるいは土地利用の純化、地区間移動を最小にするための交通計画、都市公共、公益施設の配置論といった具体的な議論が展開されている。これらの提案や建議がすべて事業化されたわけではないにしても各種の都市計画事業の思想的背景をなしたであろうことは想像にかたくない。

その時代が当面する問題を洞察し、光をあてる作業は一つの思想が時代を先がけて誕生することであり、問題解決の方向を定める。が常に、経験的には、新しい問題が生じ、育った思想を死に追いやる。事業化され、改造として実を結ぶのはその片鱗でしかない。江戸改造論は、東京改造論に連続し都市東京は大江戸につながっている。都市は改造論のなかから、自らの好むところをつまみ喰ってきたようにも思える。

元禄より引き継がれた東京改造論の主題は、300年の長きにわたってどうも変らないものようである。現代のきわめて高度な文明に支えられる都市に対しても課題は変わらず、挑戦するための武器に多少の変化があっただけで、主戦場は同じである。依然として過大・過密対策である。人びとが安心して住み、活動できる街ができて

ば課題は解消する。が、こんなことはできもしなければ、恐らくありもしない。彼岸にある理想郷であり、追い求める青い鳥である。

安心して住み、活動ができる、一見して単純のようであるが、現実には多くの矛盾があって、都市空間に仕立てるのは大変むずかしい。安全性と健康性と快適性と利便性が空間として現実化されねばならないわけで、構造物がいくら積み上っても答にはならない。ことは人間と空間の対応関係を具体化することによって、この対応関係の回転軸に土と木を選びだした明治の先輩は大変洞察力に富んだ人びとといわざるをえない。土と木は都市空間を与える基本要素である。土と木を人と空間の対応関係から、どう配置し、しつらえるかが都市空間を具体化することであり、東京を人間的に改造することなのである。

庭があれば、住いは夏を旨としてつくるのがよい。そういかなければ、少なくとも都市は夏を旨としてつくるべきである。真夏の太陽を避けて歩ける樹陰は歩道である。草いきれのする場所が児童公園のはずである。子供の手を引き年寄が裏街を安全に散歩できるのが住宅地である。熱線公害から都市を保護するために、広大な農地と水面、森林は保全されるのである。裏通りから都市の後背地にいたる全都域に、いかに土と木を回復させ、一つの秩序をもった空間の構造につくり改めることができるか、これこそ東京改造論の土木的テーマではないだろうか。

（筆者・東京大学助手 工学部都市工学科）